

岡田 八千代（おかだ・やちよ）

1、プロフィール

兄小山内薫の影響で、早くから創作に携わる。小説家、戯曲家として作品は多い。画家岡田三郎助と結婚後も雑誌「青鞥」や「女人芸術」等で活躍した。

<生没>

1883(明治 16)年 12 月 3 日 ~ 1962(昭和 37)年 2 月 10 日

<代表作>

小説『新緑』

戯曲『黄楊の櫛』『若き日の小山内薫』

<青森との関わり>

父小山内健は、旧津軽藩士、陸軍一等軍医正で、広島で生まれた。兄が小山内薫である。

2、作家解説

小説家、劇作家、演劇評論家、演出家。芹影、芹影女、伊達虫子の別号がある。旧姓小山内。小山内薫の実妹。

父は旧津軽藩士で陸軍一等軍医正小山内健。広島陸軍衛戍病院長であった健の次女として広島市に生まれた。父の死後、東京に移住。数え年 20 歳で牛込の成女学校に入学した。兄の影響もあって早くから文学に目覚め、35 年 8 月号の雑誌「明星」に小品文「めぐりあひ」を発表したのが処女作である。36 年には芹影女の名で文壇に、劇壇に注目されるようになる。

短編集『門の草』が処女作品集として 39 年 4 月に刊行されたが、その年の 12 月画家岡田三郎助と結婚している。結婚後も創作活動は止むことなく、長編小説『新緑』や『恐怖』を刊行していく。

44 年 9 月、平塚らいてうらの雑誌「青鞥」が創刊されると、八千代はこれに戯曲を発表した。大正 12 年 7 月には長谷川時雨と雑誌「女人芸術」を創刊して文壇に、

そして演劇界にも多忙となった。昭和2年夫婦でフランスへ旅立ったが、帰りは別々の帰国となった。八千代が岡田家に戻ったのは、14年に夫三郎助が亡くなってからである。

間もなく軍国時代となり、16年には、海軍報道班の戦地慰問隊に加わって中南支に旅した。戦後は、23年に日本女流劇作協会を創立、会長として活躍した。37年2月没、享年80歳。

3、資料紹介

○「別々の演技」

原稿(ペン書き)

300mm×430mm

演劇評論。東劇五月の出し物(2日目)についての批評が記されている。発表誌紙不詳。